



再 エネ系発電事業者として150 MWを超える太陽光発電所を開発してきたいちごグループ。売電単価が下がっても開発の手を緩める気配はない。いちごECOエナジーの五島英一郎社長に話を聞いた。



いちご笠岡岩野池ECO発電所

今回の未稼働対策については、賛否はあったものの、国としてやらねばならなかったと理解しているし、やるべきだと思う。

2019年は、建設予定の発電所がまだ残っている。まずはそれら

をしっかりと運転開始まで持っていく。短期目標としては、2020年度までに200 MWを稼働させたい。

もちろん太陽光発電所の新規開発もしつこく続けるつもりだ。新規開発を継続し、コストダウンの能力やノウハウを身に付けていくことは将来にとってもプラスになる。

FIT依存からの脱却を目指す動きも活発だ。

そういう意味では、同じFITの枠組みのなかでも、付加価値を持つものが推進されていくのではないかと

たとえば、最大100 MWしか繋げない場所、数百kWのパネルと1MWhの蓄電池を併設し、昼間に貯めた

電気を夜間に流すような事業モデル。これは既存系統を有効活用する方法の一つであり、蓄エネ技術は社会インフラの安定や強化に貢献できる可能性もある。メーカーなどとも協力しながら来年にも実施したい。

いちごグループは不動産を多く運用している。環境価値への注目が高まるなかで再エネ事業とのシナジ

ーも生み出せそうだが、確かに我々自身が電力需要を持っていることは強みであり、いずれは我々の再エネ発電所をつくった電気を我々の施設で使いたいという思いもある。だが、まだ先のことだろう。

発電コストが下がり、環境整備が進むなかで然るべきタイムミングが訪れるとは思うが、今はまだ再エネ発電所を増やし、多様化していく局面だ。我々のように分散した中規模発電所を数多く開発している会社はそう多くない。これからはそこに競争優位性を見出し、地域性や時代の流れに合った電源を開発していくつもりだ。

「2020年度に200MW稼働へ 新規開発もしつこく続ける」 いちごECOエナジー 五島英一郎 社長

2018年はどういう

1年だったか。自然災害の多い1年だった。我々の発電所が風水害による直接的な影響を受けたわけではないが、周辺道路や斜面の一部が崩れた。利益補償の保険に加入しているとはいえ、数週間にわたって発電を停止せざるを得ない発電所もあった。太陽光発電の強い部分や弱い部分、あるいは克服すべき課題が明らかになったのではないか。

現在の開発状況は。

売電開始済みと開発の確定した再生可能エネルギー発電所の合計容量は約152 MW。それに確度の高い案件を足すと、およそ200 MWになる。太陽光発電所を中心に風力発電所も増加している。

太陽光発電所については、出力2 MW未満の高圧発電所を中心とした新規開発に引き続き力を注ぎ、着実に案件を増やせている。(他の事業者との)競争が減り、

腰を据えた形で地主と交渉できているともいえる。

12月5日に修正された未稼働対策が出たが。

我々の開発している発電所で今回の措置の対象となるのは1カ所だけだ。林地開発などの許認可も不要な2 MW未満の高圧発電所で、連系日が運転開始期限を半年ほど超過してしまいが、太陽光パネルの変更も認められており、事業への影響は軽微だ。